
恋姫無双 曹丕伝

励行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双 曹不伝

【NNコード】

N5172N

【作者名】

励行

【あらすじ】

曹操の弟として生まれた青年の、長く険しい、しかし明るい戦乱の記録。彼はどのような道を歩み、その果てに何を見つけるのだろうか。

という長ったらしい駄文です。初投稿ですので適当に見守ってやってください。恋姫の一次創作です。キャラ壊しなどあつたらすみません。

序（前書き）

主人公の名は曹丕。字は子桓。真名は華景といいます。
このキャラ以外にオリキャラは追加するつもりはありません。
では、どうぞ。

序

漢王朝の時代。それは長く、平和で、そして腐っていた。
俺が物心ついた頃の漢は、特に酷い有様だったことを良く覚えて
いる。

曹家に生まれ、曹丕といふ名と、華景^{かけい}という真名を授けられた俺
は、幼い頃から華琳 賢姉と共に母に連れられて洛陽に行くこと
もあった。

その時に見た光景を今でも鮮明に覚えている。

活氣のない街。飢えた民。子供ですら虚ろな目で道端に転がって
いた。
当時の俺はそれを見て、これが華の洛陽かと驚愕した。そして同
時に、激しい憤りを感じた。

街を見ただけで分かる、腐った宦官達の行いに。

そして俺は、その頃から心に決めた。誰も飢えない、何者にも困
しない国を造ると。

賢姉にその話をすると、賢姉は笑つて俺を撫でてくれた。

「そうね。必ず、強い国を造りましょう

そう言つてくれた。

今思えば、あれが俺達姉弟の始まりだったのかもしれない。

それから俺達は、それまで以上に勉学に、武の鍛錬に励んだ。
軍略を学び、政を学び、己の武を高めた。

夏候惇　　春蘭、夏候淵　　秋蘭の姉妹に出会つて、皆が競いあつた。

そして青年と呼べる年齢になつた頃、俺は賢姉との決定的な違いに気付いた。

賢姉は非常に頭がいい。今までに学んだことを全て貪欲に吸収し、自分のものにしていく。

教えに来た老師を口で食かした時は流石にやり過ぎだと思ったが。そして武も、一兵卒では束になつても敵わないほどに強い。

かと思えば、詩を詠み、舞いを嗜む芸術家のような才能を垣間見せる。

人を惹きつける風格も、生まれたその時から持つていた。

まさしく完璧だった。賢姉に出来ないことなど、さうとないのだ
らう。

それに比べて俺は、賢姉ほど頭が良いわけではない。
軍略に関しても政にも、賢姉には届かない。これからも届くことはないだろう。

詩も詠めないし舞いも不向き。その手の才能は皆無だった。
だが、そんな俺でも唯一、賢姉に勝てるものがあった。

それが俺の武。

賢姉と同じ大鎌【断】では、賢姉にも、夏候姉妹にも負けたこと
はない。

これが俺の誇りだ。誰にも負けない武。誰にも負けられない武。
だから俺は、誓いを立てた。

どんな敵だろうと、どんな状況だろうと、俺は最後まで背中を見
せない。

そう誓つたんだ。

陳留の刺史となつてから随分と経つた気がする。
思い返せばあつという間だつたけれど、忙しそうにそんなことを
する暇も無かつたといつことか。

ふと窓の外を見ると、小鳥が一羽、仲が良さそうに飛んでくるの
が見えた。

そういうえば、最近は華景の顔を見ていない。
お互に忙しいとはいへ、少し寂しさを感じる。

未だに弟離れできていない自分に苦笑する。こんな事では華景に
笑われてしまうかしら。

でもそれはあの子も同じ。あの歳になつても昔と変わらず賢姉と呼
んで慕つてくれる。

あの子は強い。だから心配はしていない。

最後の書簡を書き終えてぐうつ、と体を伸ばすと、扉が開いて秋
蘭が入ってきた。

「華琳様、お疲れ様です」

「ええ。でもこれで一段落つけるわね」

「そうですね。兵のほうも練度は高まっています。姉者と華景様の賜物です。

それに、よりやくお一人にお休みいただけますから」

秋蘭の言葉に、私はともかく華景が休暇を取つていなことに呆れた。

本当にあの子は、無茶をする。

「華景様にも同じ事を言つたら、『賢姉は無茶をする』と笑つていましたよ」

「華景にだけは言われたくないわね、その言葉は」

それを聞いていて、自然と顔が綻ぶ。
流石は姉弟と言つたというかしらね。同じ事をして呆れあうなんて。

「だったら早く休もうぜ? 賢姉」

扉から聞きたなれた、しかし懐かしさを覚える声がした。

そちらを見れば、蒼い外套を身に着け、少し長い黒髪をうなじで纏めた青年　　華景が、いつもと変わらない笑顔を浮かべてたつていた。

しかし、笑顔の田のしたには若干の隈があり、疲れきっているのがよく分かる。

「私はいいから貴方こそ早く休みなさい、華景。顔が酷いことにな

つてゐるわよ

「いや、俺より賢姉の方が重症だぞ。白髪の髪が少し荒れてる」

「今日はお風呂の日だから後で直すのよ。それに華景にせつかくの外套が汚れてるわよ」

「後で洗濯するから問題ない。それより

「お二人とも」

言い合つ私達に、秋蘭の凛とした声が響いた。

言い争いに夢中になっていた私達ははつとして、秋蘭を見る。

秋蘭は真顔で、心なしか呆れているよつて見えた。

「お戯れになられるのは良いのですが、お二人ともこれ以上ないほどにお疲れです。

今日はもう仕事はあつませんから、早くお休み下さー

「え？ 警邏と調練はまだ終わってないぞ？」

「私と姉者で行つておきまー

「まだ政務が残つていたはずだけビ?」

「急を要するものはあつません

「だつたら鍛錬でも

「今日は庭師が中庭の手入れをしておりますので、中庭は使えませ

「ん

「なら兵法書でも読もうかしら」

「申し訳ありませんが、今は書庫の整理をしておつます」

是が非でも私達を休ませたいらしい。

あの手この手で私達が仕事に関わるのを阻んでくる。

最後にはこちらが根負けして、ふう、とため息を吐いた。

「分かったわ。そこまで言われたら仕方ないわね」

「…………賢姉、その兵法書置いつぜ」

「華景JANNAの武器を出しなきこ」

「「「…………」」

私達はビームでも仲のこい姉弟だった。

休暇 — (前書き)

あれ、おかしい。始まっていきなり休暇とか・・・。
ま、まあ、気にしないでおいで。うん。

秋蘭に無理やり休暇を取られ、俺はどうしたものかと悩みながら城内をふらふらと迷い歩いていた。

何せ練兵場に行けば夏候姉妹に追い出され、執務室に行けば文官に説き伏せられ、鍛錬をしようにも武器を没収され、書庫に向かえば何故か門番に追い返された。一体俺は何をすればいいのか。

そうしてふと考へると、俺には趣味といえるものがない。強いて言つならば鍛錬なのだが、これは禁止された。

我ながら、本当に面白みのない人間だな、俺。

苦笑しながらふらふらとしていると、城門前でぱつたりと賢姉に会つた。

「賢姉、どこか行くのか？」

「ちょうどここにいたわね。華景、付きてなさい

俺が声を掛けると、賢姉は俺を見た途端に笑顔になつてすばやく俺の右腕を驚づかみにする。さらには絶対に逃がすものかと言わんばかりにギリギリと力を込めてくるから

「賢姉血が止まるー 腕がもげるつてえええー！」

「やつ、早く行くわよ」

まるで聞いちゃいない」様子の賢姉。清々しいほどの笑顔が痛い。

ああ、あの笑顔は俺にとつて良くないことを考へてる顔だ・・・。

抵抗できない俺は、今日が無事に終わることを祈りながら賢姉に引き摺られて街に向かっていくのだった。

服屋。

それは服装を意識する女性にとって非常に大切な、どれほど時間をかけても足りないほどに重要な場所。・・・らしい。

「華景、これはどうかしら?」

「ちょっと伸びしそぎじゃ すみません何でもないです」

服屋。

それは、俺の寿命が削られ続ける恐ろしい空間である。

服屋といえば、賢姉は昔から断固として可愛い系の服を着なかつた。ふりふりのやつとか、ふわふわしたやつとか。

その理由を聞いても笑顔で威圧されるだけで教えてもらつたことはないが。

「賢姉つてもう少し可愛い系の服も着ればいいのに。綺麗系より似

合つかもよ?」

「貴方が着てみる? キツと素敵になるとになるでしょ? ね」

人はそれを『見るに耐えない』と言つ。

そもそも六尺(180cm)近い体格の俺がそんなことをした日には、俺はあまりの羞恥心と氣色悪さに長江に身投げする自信がある。

というか普通に田に毒だ。

「ま、まあ、それは遠慮してくれ

苦笑いを浮かべて辞退すると、賢姉は残念ね、と呟いて再び服選びに戻つていった。

「この服屋は初めて來たが、意外にも前にいた街よりも服の種類が豊富なことに感心した。

女性服専門だからなのか店員も客も女性ばかりなのがちょっと辛いが、それはいつもの事と視線を受け流す。

ここまで散々こうした買い物につき合わせられてきたために、こうした空氣に耐性がついてしまつた。

なんとも複雑な気分だが、役に立つてゐるから良しとしておこう。

「これなんかどう? なかなか良いと思うのだけど

「おおう、ちつと見え過ぎてないかい? 主に中が

いや、流石にそれはないと思つぞ、我が姉よ。

それからあれやこれやと服を見て回つて、気がばそろそろ匂餉時となつていた。

服屋を後にした俺達は適当な（賢姉お勧めの）飯屋に入った。外装からして高そうな店だが、内装もこれまた高級感溢れるもので、奥は個室になつているようだ。

こんなとこ来たら財布の中が素敵な事になりそうだな。

「これはこれは曹操様に曹丕様。よつこいりつしゃいました」

奥から恰幅の良い店主が揉み手をしながら笑顔で出迎えてくる。それに適当な返事を返すと、慣れた様子で奥の個室に案内された。賢姉はここに常連らしい。よく財布の中身を持つな・・・・・。

席に座つて注文を済ませ、微妙な間が空く。

いつした間が空くと、何故か俺が話を振らなくてはならない使命感に駆られてくる。

別にそんな必要はないはずなのだが、無意識の俺は知らぬ間に話題を探して話していた。

「最近、近隣の賊共の動きが活発になつてゐるらしいな。
隣の州牧のところは特に酷いことになつてゐるよつだ」

頭を捻つても仕事の話しかなかつたのが残念だが、これも重要な話だ。

管路の似非占いが広まつた後、それを待つていたかのように賊の動きが派手になりだした。

漢には期待していないが、各地の諸侯がそれを抑えられないほど無能だとは思わなかつた。

これが何かの前触れかは分からぬが、準備はしておいて損はない

いだらう。

「ええ、みたいね。それも気になるけど、もつ一つ気掛かりな事が
あるのよ」

「んん？ 賊に関してか？」

「この間、豪族の屋敷に賊が押し入ったことがあつたでしょ？
その時にその豪族が隠し持つていた書物が盗まれたらしいのよ」

豪族が隠していた書物、ねえ。

賢姉が興味を持つほどの中なら限られてくるが……。

「…………太平妖術の書。聞いた事くらいはあるでしょ？」

「ん~…………あるにはあるが、実在してたのか」

太平妖術の書というのは、持つ者によつて価値が変わる奇怪な書
物だつたか。

何が書かれているのか興味はあるが、そんなものは無いだらうと
思つていた。

「それを奪つた賊が、まだこの辺りにいるかも知れないの。
賊の討伐をするならついでに手に入れたいものね」

「せりつと言つ事じやないからな。でもまあ、確かに一度読んでみ
たくはあるな」

「トらない内容じやないことを祈る。

久しぶりの休暇も、結局仕事からは抜け出せない姉弟であった。

休暇 — (後書き)

予想外に長くなりそうだったから無理やり切つたけど、やつぱりおかしくなったかな?

次は季衣とか桂花とか、出したいなあ・・・。

一話（前書き）

ついやく書き終わった。
桂花が何故かこんな性格に。

休暇を満喫した俺達が仕事に戻つて数日、我らが曹操軍は賢姉の指揮の下に賊討伐の準備を行つていた。

陳留では賊の数は減少してきているが、前にもいつた通り、近隣の太守や州牧が無能なせいで全体的な数は増え、何やら不穏な空気が大陸を覆い始っている。それを感じた賢姉は、賊の討伐を名目に軍を動かし、名を上げようとしているわけだ。

かく言つ俺も、この数日はまさにてんてこ舞いであれこれとしていたわけで。中途半端に頭が回るのは考え方だな・・・。

そして今、俺は城壁の上に腕を組んで立つていて。別に暇だからかつこつけてるわけじゃないぞ。糧食を任せた誰かさんの報告を待つていてるだけだ。

賢姉の趣味と実益を兼ねて定期的に行つてている仕官募集で、たまたま面白い文官志望がいた。

その時の試験官は俺じゃなかつたが、秋蘭曰く「手際がいい」らしい。文官が不足している俺達にとつてはうれしい話だが、実際に仕事が出来るかどうかはまた別の話だ。それを見る上で、糧食を任せたんだが・・・。

「・・・・・遅い」

待つこと一刻。

これほど待たせてまだ来ないとは・・・。誰かさんはよほどいい根性をしているらしい。

さつきから俺の後ろをちょろちょろと走り回っている誰かさんは特に。

猫の耳を模した頭巾を被つた、小柄で若干垂れ目な、性格がきつそうな文官風の誰かさんは、書簡を持って一刻ほど前からこの辺りをうろうろとしている。誰かを探しているのは一目見れば分かる。誰を探しているのかも分かる。そしてそれが何処にいるのかも。

これはあれか。上高を甘く見ているのか。

「おい、猫」

こめかみを震わせながら、とりあえず声を掛けてみる。
しかしそれを誰かさんは華麗に無視してくれた。まるで俺がいかのよう見事に。

「お前だ、猫」

もう一度声を掛ける。

無視。

ああ、なるほど。これが無視される人の気持ちなのか。
確かに怒りたくもある。

眉間を押さえて一度大きくため息を吐き、すう、と空気を吸い込む。

「……………そこのお前だ……………」

これでもかとこうくらに声を張り上げ、城中に響き渡るほど

声量で怒鳴る。

びりびりと空気が震えた。

それでようやく誰かさんは動きを止め、涙目になりつつも勢いよく俺に振り返って睨んでくる。

「な、何よ！ 私はあんたみたいな男に用はないわ！」

負けじと怒鳴り返していくが、その姿は怯えて威嚇していく猫のもの。

これが期待の文官かと思うと、些か不安になつてくる。

「お前が荀？ だな？」

こんな姿を見せられたら怒氣も失せてしまい、呆れ半分で一応の確認をする。

「そりゃー 何か文句あるーー？」

ある。大いにある。主に態度や言葉遣いに。

そう思いながらも出かかった言葉を飲み込み、努めて冷静に次の言葉を選ぶ。

「お前に任せた糧食の帳簿がまだなんだが？ まさか、まだ出来ていないなんてことはないだろうな？」

「何で男のあんたにそんなこと教えなくちゃいけないわけ？ だいたいあんた誰よ？」

まさか変態！？ 近づかないで妊娠するでしょ！」

変態つて・・・。つてか近づいただけで妊娠するなら今頃は國中

が子沢山になるだらう。

「俺がそれの責任者の曹不だからだ」

だからな、さつさとその書簡を渡せ。いつまはお前に付き合つて
いるほど暇じゃないんだ。

俺が名乗ると、荀?の顔色がさつきとは打つて変わつて別の意味
で怯えた顔になり、ピタリと罵声が止んだ。
この猫、俺の顔を知らなかつたのか。それでもなければあんな事
は言えないよなあ。

桂花 side

え？ ちょっと待つて。この男が曹不?
確かに何処と無く曹操様と似てる氣もするけど、え?
ということは、私、曹不様に向かつてあんな事言つてたの？

血の氣がさつと引いていくのが自分でも分かるくらいに青ざめる。

曹姉弟の仲の良さとその才覚は有名だ。この一帯の州で曹姉弟を
悪く言う者はまずいないほどの善政を敷き、また才能ある者ならど
んな身分でも取り立てる一風変わった人柄。姉弟で街を歩いている
ところもよく見られているらしい。

そんな方々だからこそ仕官したのに、早速やつてしまつた。自分

の「」の口が嫌になる。

曹丕様は寛容な方だと聞いているが流石にこれは絶望的だらうな、
と他人事のように思つた。

男が相手だと、何故か私は口が悪くなる。

別に本当に男が嫌いなわけではない。ただ氣づいたら罵声が飛び出している。そのせいで今までろくに男と話したことがない、影で色々と言われていた事も知つていて、でも、どうしても治すことが出来ない。自分ではどうしようもないと諦めているし、今まで男の上官が居なかつたこともあつてどうともなつた。

でも今回はそれが仇となつた。

このままでは良くて追放、最悪の場合曹操様に会つ事無く斬首。

いや、でも「」で何とか私の事を認めさせれば、私が考えた通りになるんじや？

「荀？」

「は、はい」

いきなり名を呼ばれ、強張りながら返事を返す。

「とりあえず、その書簡を渡してくれるか？ 結構急ぎなんでな」

「あ、申し訳ありません！」

急いで抱えていた書簡を曹丕様に手渡す。

曹丕様はそれを受け取り、内容に目を通す。

その顔がどんどん険しくなつていくが、それは計算のついただ。

読み終わった曹不様が顔を上げる。

さあ、どうくる？

華景 side

これはまた、面白いなあ。

何が面白いって、頬んどいた糧食が半分しか用意されていない。どう考へてもこれはわざとだよなあ。なかなか面白いとは思つていたが、まさかここまで面白い子だとは思わなかつた。

俺、そんなに舐められてるのか。

読み終えて顔を上げると、ちょうど賢姉と夏候姉妹が城壁に上がつてきた。

「華景様、何かあつたのですか？」

春蘭が控えめに尋ねてきた。

それに笑顔で頷くと、賢姉に書簡を手渡す。

「これは？」

「なかなか愉快な糧食の帳簿だ。ここまで面白いのは久しぶりな気がする」

俺の不可解な言葉と笑顔に首を傾げながら賢姉も書簡に目を落と

す。

読み進めるうちに俺の言葉の意味を理解したりしつゝ、顔を上げたときには賢姉も俺と同じ笑顔だった。

「で、これの監督面はどうしているのかしりべ。」

「ここの子だよ」

言いながら荀？の背を押して賢姉の前に立たせる。荀？はすぐに臣下の礼をとつて賢姉の前に跪いた。

「そう。貴方がこれを？」

「はい。」

十分な量は準備したつもりですが、何か不備がありましたでしょうか？」

「十分？ これがか？」

いやいや、不備ありすぎて問題なんだが？

「どこのが十分な量なのかしら・・・？」
指定した量の半分しか用意できていらないじゃないの！」

賢姉がそういうと、後ろで夏候姉妹がそういうこととかと納得したよに頷いた。

「ここのまま出陣していたら糧食不足で行き倒れるとこりだつたわ。
そなつたら、貴方はどうやって責任をとるつもり？」

「いえ、そなつはないはずです」

自信ありげにそつ言い切つて賢姉を見る苟?。何を根拠にそつ言つてこゐるやひ。

「ほう。それは何故かしら?」

賢姉の目が光る。

「三つ、理由があります。お聞きいただますか?」

「いいでしょ。それが納得のいくものなら今回の事は不問にしてあげるわ」

納得いかなければ処罰する。

賢姉がしなければ、俺が。

「」納得いただけなれば、それは私の不能がいたす所。この場で我が首、刎ねていただいて結構でござります」

・・・・・なるほど。それほどの覚悟を持つて望むか。これは何を言うのか見物だな。

「・・・・・一言は無いぞ?」

「はつ。では、説明させて頂きますが」

苟?が一拍いれる間に、賢姉達の隣に立ち位置を変える。聞くなら正面から聞いたほうが面白い。

「まず一つ曰。

曹操様はとても慎重なお方ですから、糧食の最終確認は必ず「自分でなさいます。

そこで問題があれば「いつして責任者を呼び出すはず。 ですので行き倒れにはなりません」

「いつ・・・・・！」

反射的に大鎌に手を添えるが、それよりも早く賢姉が激怒していった。

「なつ！ ば、馬鹿にしてるのー？ 春蘭ー！」

「はつー！」

そこではつと想い返し、慌てて賢姉を止めにかかる。

「賢姉待つた！ 後一つ、理由が残ってる。首を落とすのはその後だ

ここで首を刎ねたら約定を破ることになる。
それはまずい。

「華景様の言つとおりです、華琳様。それに先ほどのお約束は…
俺と秋蘭の言葉に賢姉は振り上げかけた大鎌を止め、少ししてから短く息を吐いて力を抜く。

「

「…・・・・・ そだつたわね。で、次の理由は？」

「はつ。一ひとつは、糧食が少なくなれば輸送部隊が身軽になり、行

軍の速度も上がります。

その結果、討伐行全体にかかる時間が大幅に短縮できるでしょう

確かにその通りだ。

糧食が少なければ、行軍速度は『上がる』

「んん？　・・・なあ、秋蘭」

「どうした、姉者？　何かあつたか？」

「行軍が早くなっても、賊の討伐自体が短くなることはないよな？」

「ああ、ならないぞ」

「そうだよなー。よかつたあ。私の頭が悪くなつたのかと思つたぞ」

「そうか。良かつたな、姉者」

「うむー！」

春蘭の言つとおり。

いくら早く動けようが、討伐にかかる時間は変わらない。

そもそも行軍速度が上がると言つても、そこまで劇的な変化があるはずもない。

せいぜいが一割増し、良くても二割が闇の山だ。
それをどう縮めるつもりだ？

「まいい。それで、最後の理由は？」

「はい。・・・三つ目の理由は、私が提案する策を用いれば、

賊の討伐にかかる時間はさらに短縮できるでしょう。
よつて、この量の糧食で十分だと判断いたしました

…………はあ。ほづまづ。

「曹操様…どうか」この荀？めを、曹操様を勝利に導く軍師として麾下にお加え下せよませ…」

なるほどなるほど。

こいつ、最初から…うこううつもりだったわけか。
本当にいい根性してやがる。

「…………華景。」の子、確かに面白いわね

「だろ？ 言つた俺もびっくりしてる」

熱い決意を胸に願い出る荀？と、それに驚く夏候姉妹をよそに俺達は互いに笑いあう。

お互に考えていることは同じようだ。

「荀？ とこつたかしら。貴方、真名は？」

「はつ。桂花に」やこます」

「そう。桂花、貴方、私を試したわね」

「はい」

なんともすんなりと認めた。

これには流石に怒りを通り越して感嘆してしまう。

だが、うちの將軍には逆効果だぞ。

「何い？ 貴様、いけしゃあしゃあと・・・・！
華琳様一このよつな無礼者、すぐに首を落とすべきです！」

案の定吠え出す春蘭だが、桂花はそれに臆する事無く言つ返す。

「あんたは黙つてなさい！」

私の運命を決めていいのは曹操様だけよー！」

おうおひ、言つねえ。切れてる春蘭に向かつて、大した度胸だ。
それとも、今は賢姉しか見えていないのか。それはそれで問題だ
な。

「あ、貴様あーーー！」

さらに怒り出して大剣を抜こうとする春蘭の肩を抑える。
今此処で暴走されたら、賢姉がやろひとしていることの邪魔にな
る。

それは面白くない。

「春蘭、落ち着け。全ては賢姉次第だ」

「ぐつ、うう・・・・華景様が、そう仰るなら」

顔を歪めながらも、春蘭は素直に大剣から手を放した。
それを確認して、賢姉は桂花に話しかける。

「桂花。軍師としての経験はある？」

「ほ。こに来る以前は、南皮で軍師をしておりました」

「…………そ」

「南皮つていうと……あ、麗羽のとこか。
あれだったら出て行きたくなるな、確かに。」

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きせしなかったので
しょう。」

それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「……まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。
まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振
るつこと、何を惜しみ、躊躇う事がありまじよ！」

「……ならばその力、私のために振るつことは惜しまないこと？」

「ひと目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。
もし」「不用とあらば、この苟？、生きてこの場を去る氣はありません。
せん。」

遠慮なく、この場でお切り捨てくださいませー。」

それを聞いて、俺は喉の奥でクツクツと小さく笑った。
賢姉が好きそうな性格してる。

「いい人材を見つけてきたな、秋蘭」

「我ながらそう思います」

賢姉は無言のまま、手に持つ大鎌の切つ先を桂花に向けた。その顔はうつすらと笑っている。楽しんでるなあ。

「……桂花。私がこの世でもつとも腹立たしく思うこと、それは人に試されることよ。

分かっているかしら？」

「はい。そこをあえて試させて頂きました」

賢姉の手に力が込められる。

「そう。……なら、いつする」とも貴方の掌の上ということね

一瞬力を抜いたかと思うと、次の瞬間には大鎌を振り上げ、桂花に向かつて躊躇せずに振り下ろした。

大鎌が風を切り、はらりと桂花の前髪が少しだけ舞い落ちる。

「……やつぱ、そうするよな」

大鎌の切つ先は寸分の狂いも無く、桂花の首の前で静止していた。後少しでも動かしたら桂花はお陀仏だつただろう。

「当然よ。……でも桂花、もし私が本当に振り下ろしていたら、どうしていた?」

「その時はそれが天命と受け入れておりました。

天を取る器に看取られることは誇りこそすれ、恨むことなどありません」

口達者なのは、考え方だな。

軍師つてのは特に。

「嘘は嫌いよ。本当のことをおっしゃいなさい」

「曹操様の『』気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いないと思いましたので。

避ける気など毛頭ありませんでした。・・・それに私は軍師であつて武官ではありません。

あの状態から曹操様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした

た

「そりゃ・・・」

小さく呟いた賢姉が、桂花に突き付けていた大鎌をゆっくり下ろす。

「・・・ふふつ、あははははー。」

「か、華琳様・・・？」

突然笑い出した賢姉に夏候姉妹が戸惑うが、それにはお構いなしに賢姉は言葉を紡いだ。

「最高よ、桂花。私を一度も試す度胸とその智謀、気に入ったわ。あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらひ事にする。いいわね？」

「はっ！」

「ならまづは、この討伐行を成功させてしませなさい。
糧食はこれで十分と言つたのだから、もし不足したならその失態、
身をもつて償つてもらつわよ？」

「御意…」

さあて、これからは楽になるといいがな。

一話（後書き）

長い！ 我ながら長い！
そして桂花がどことなく小心者に？
すいません、これが私の限界でした・・・・・・・・・。

話題（前書き）

前の話が長すぎたから今日は短めにします。

かくして、新しい軍師を迎えた我らが曹操軍は、意氣揚々と出陣した。

いや、意氣揚々つてのは言葉が悪いか。肅々と厳格に、だな。

晴天の下、俺は先頭だって馬を進ませる。

一応これでも賢姉の弟で武官筆頭だからな。俺が先頭にいることとで士気が高まることがある。

ちなみに賢姉は軍の中程に桂花と、その護衛と言つ形でそばに秋蘭もいる。

春蘭は俺の隣で若干不機嫌そうに不貞腐れている。
大方、賢姉の傍にいるのが桂花だから不服なのだろう。

「そう怒るなよ、春蘭。今回は仕方ないだろ？」

「むう。ですが、何故新参者のあやつが華琳様のお傍に・・・」

「昨日あれだけ相手をしてもらつただろうが。今はあれで満足しきなさい」

「それとこれは話は別です！」

先刻からずつとこんな調子で拗ねるもんだから、とてもじやないが手に負えない。

賢姉か秋蘭がいればどうにかなるのかも知れんが、それは無いものねだりといつづつか。

「華琳様の決定ですからあやつが軍師となるのは仕方ないとは思いますが、あの泥棒猫が華琳様のお傍にいることには納得できません！」

「いや、納得する訳々の話ではなくてだな・・・」

「あやつが来てからとこうもの、華琳様の『龍愛を受ける機会』がめつきり減ったのですよ！？」

何かにつけては出し抜かれてしまって、あやつばかりが

「

あー、誰か来てくんねえかな。
なんか勝手に白熱してすゞここといつてるんだが。

一人で盛り上がっている春蘭から田を逸らして空を見上げる。

天気いいなあ。雲一つない晴天つてのはほこひつのを言つんだろう
うなあ。

あ、蝶々。

「姉者、華景様。華琳様がお呼びです　どうかなさいました
か？」

「・・・あ？　秋蘭か。いや、天気いいなあつてな。すぐ行く

空を仰ぎ見る俺を心配そうに見る秋蘭に適当な返事を返し、一人でしゃべり続ける春蘭を連れて、俺は賢姉の下に向かつて後退していった。

「華景様と春蘭に、偵察部隊を率いて先行していただきたいのです」

本陣に着くと、軍議の場でいきなり桂花にそんな事を言われた。もう少し順を追つて説明してもらいたいものだが、なんとなく言いたいことは分かる。

「一応聞くが、何の話だ？」

「先ほど先行していた偵察から報告がありまして、前方数里ほど地点に旗のない集団を発見いたしました。

報告を聞く限りではおそらく野盜か山賊の類と思われます」

「で、とりあえず様子見の意味でもう一度偵察隊を向かわせようと思つただけれど」

桂花の言葉を途中から賢姉が続ける。

軍議の前に報告が来て、一人で話し合つたのか。
それから軍議を開いて確認しているらしい。

「それで俺達か」

ふむ。俺としては特に文句もない。
強いて言つなら、よくもいきなり俺を顎で使いやがる、ぐらいだ。

だがそこで、正気に戻っていた春蘭が食つて掛かった。

「ちょっと待て！ 何故そこで華景様が行かねばならんのだ！
偵察だけならば私だけで十分だろ？！」

まあ、確かに俺じゃなくともいいんだがね。 春蘭の言ひつとおり。
ただ春蘭だけじゃあ不安なのも確かだわな。

「あんた馬鹿！？ ちゃんと状況判断が出来て、的確な指揮が出来
る人が行かないと偵察の意味がないでしょ？」

追記するなら、それが出来る武官は俺の他には秋蘭のみ。
こんなことに賢姉は駆り出せないし。

春蘭？ や、春蘭は・・・・・ねえ？

「ぐつ・・・・・！ それでは私が馬鹿のようではないか！」

言わない・・・・・。俺は言わないぞ・・・・・・・・・。お前は馬鹿
だとは・・・・・！

堪えているのは皆同じじらしく、天幕の中を一瞬、静寂が支配する
空間と化した。

「・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

「な、何故ここで黙るのですか！」

・・・・春蘭。人には耐えねばならん時があるのでよ。

「・・・・まあ、とりあえず俺と春蘭が行けばいいんだな

「はい」

「お願ひするわね、華景」

「了解」

秋蘭に宥められる春蘭を横目に、軍議は終了した。

すまん、春蘭。また今度、賢姉に相手してもう一つまつた父涉するから。

一話（後書き）

春蘭の扱いが若干不憫な気がしますが、原作もこんなもんだつた気がします。

やりすぎだつたらすいません。

続・一話（前書き）

三點リーダーを使ってみました
変だったら教えて下さい

そんなこんなで先遣隊を率いて道を急ぐ俺と春蘭。

戦は乐じやないのは分かつてゐるが、まさかこゝも早々と仕事が回つてくるとは思わなかつた。我らが軍師殿の神經の図太さにはほどほど感心せざるを得ないな。まるで俺に恨みでもあるんぢやないかと勘繰りたくなるほどに。愚痴を言つても仕方ないのも分かつているが、どうにも桂花が俺を見るときの目に敵意を感じてしまう。いや、敵意といふか、殺意？よく分からぬが目を合わせるたびに睨まれているような気がするんだよなあ。すぐに逸らされるし。

「…………なあ、春蘭」

「はい？」

「俺、先が思いやられるわ」

「は、はあ…………？」

俺の突然の言葉に疑問符を飛ばしながら首を傾げる春蘭。

何のことか伝わつていなが、説明するのも億劫なのでそのまま進んでいく。

これ以上後ろ向きな気分になる前にひとと仕事を終わらせて帰らひ。

報告があつた辺りに到着すると、そこからさらに先のほうに確かにそれらしき集団が居るのが見える。数にして大体数十人くらいの、いかにも野盗といった連中が何かを囲んでいるようだ。そして、その中心辺りで人が物理的に昇天している。新しい宗教の儀式だろうか？また物騒な儀式をする連中もいたものだ。

そんなどうでもいいことを考えながらさらに距離を詰めていくと、どうやら連中は小さな女の子を囲んでいるようだ。先ほどから上がっていた人間花火はその子が一人で行っていたらしい。というかあの子、なんつう馬鹿でかい鉄球振り回してんだ？

「子どもが戦ってるな」

自分でも驚くほど冷静に、田の前の事を呟く。

「な！ 何ですとー？ 早く助けましょー！」

いや、行くつもりなんだが。

と春蘭に言う間もなく、彼女は颯爽と？　いや、猛然と賊共に向かつて突撃していった。

春蘭。お前はそんなだから馬鹿にされたり猪呼ばわりされるんだぞ？

「あの…曹丕様、我々はどうすれば？」

見事に置いてけぼりを食らつた後ろの部隊の一人が、戸惑いながら俺に聞いてくる。

どうつて、あれを追いかけるに決まつてゐるだろ？

「誰か曹操様に報告に行け。それから何人か賊を泳がせるから、後を追う者を数人置いていく。
それ以外はあれを追いかけるぞ」

あれ、と親指で春蘭を指し、返事を返す兵達と共に走り出す。

賊が束になつて宙を舞つ。俺が行かなくともよくないか？

「まだまだあ！……！」

「でえええい！……！」

掛け声をかけながらどんどん敵を吹き飛ばしていく春蘭と少女。どうみてもやり過ぎだろう。吹っ飛んで粉々になつてる奴とかいるし。血の雨つて本当に降るんだな。

ただでさえ一人の怪力に薙ぎ倒されていた賊たちは、俺達が到着したことによりもともと無いに等しかった士気がさらに落ち、一人、二人と逃走を始めだした。これで後は追跡させて本拠地を探り出せばいいだけだ。……俺の仕事、無かつたなあ。別にいいけどさあ、こう、武官として、ねえ？

「待てい！　逃がしあせんぞ！……！」

「お前が待てい」

さらなる暴走を始める前に春蘭の襟を引っつかんで無理やり押し

止める。

「何故止めるのですか！？」

「あいつは本拠地まで案内してもいいんだから、我慢しなさい」

「？……おお、なるほど。おおこー、誰があるー。」

「わかったらわかるからな？」

おお、春蘭よ。お前の愛すべき馬鹿を加減が切なくなつてへるだ。などと一人でじやれ合つてゐると、少女が遠慮がちに声を掛けた。

「あの、助けて頂いてありがとうございましたー。」

髪を二つに分けて括つている活潑そうな少女は、そつこつて勢いよく頭を下げた。

礼儀正しい子だなあ。将来子どもが出来たときまつり育つて欲しいものだ。でも鉄球を振り回すほどやんちゃなのは勘弁。いや、そもそも相手がいないだよ。

「おおー！ 怪我はないか？ 勇敢な少女よ

「あ、はーー 大丈夫ですー！」

仲が良さそうに笑いあつ一人は、性格の似通つた姉妹のように見えなくも無い。

「どうか、春蘭がちゃんと姉に見える！不思議！」

「それはさておき、何でまた一人で戦つてたんだ？　これは勇敢と言つよりも奮勇だぞ」

確かに一人で賊と戦つのは勇気ある行動だろう。だが、それで殺されでは元も子もない。

言い方は悪くなるが、勝てなければどれほど強かろうと無意味なのだから。

「それは……」

言ひ咎める俺に、気まずそうに話しうわとしたといひで、ちようど後方から賢姉率いる本隊が到着した。
まるで俺達の事を見ていたかのように。

それに春蘭が手を振つてゐると、少女の表情がさつきまでの嬉しそうな顔から一変して驚きと怒りに変わつたように見えた。
いや、怒りかどうかは分からぬが、そんな風に見えた。

「報告は聞いたわ。ご苦労だつたわね、春蘭、華景」

「俺はなんもしてないけどねえ。全て春蘭との子がやつてくれたよ」

いや本当に。俺つてば要らない子だったよ。

「もしかしてお姉さん達、國の軍隊…………！」

「ん？　まあそなだが…………！」

春蘭が答えた途端、少女が春蘭に向かつて鉄球を振っていた。
寸でのところで反応できた春蘭は迫り来る鉄球を弾く。そしてそれはそのまま俺の方へ

華琳 siide

とつさに春蘭が弾いた鉄球が、ぼうつと立つていた華景に向かつていいく。

突然の事に呆気にとられていた私はそこではつと我に帰り、未だにぎさつとしている愚弟に叫んだ。

「華景！ 前を見なさい！」

鉄球が目前に迫つてきて、よつやく華景は動き出した。

ギリギリまで来た鉄球を大きな音を立てながら思い切り蹴り上げ、それに少女が気をとられている間に素早く肉薄する。

それに反応し切れなかつた少女の背後に回り込むと、少女の腕を捻り上げて首に大鎌の刃をあてがつた。

少女は武器を落とし、地面に倒される。

「あう！」

「……で、この子殺していいのか？」

普段とは違う、酷く平坦で感情がこめられていない声で、少女を睨むでもなく見下ろす。

対する少女は身動きできず、ただ華景と私達を睨んでいた。

「待ちなさい、華景。まだこの子には聞きたい事があるのよ

放つておくと本気で殺してしまひ。

華景に待つたをかけ、押さえている少女を解放させる。

華景は少女を放しはするが、鋭い目線だけは決して離さず少女の背後に立つたままだ。

手にしている大鎌も何かあればすぐに首を刈り取れるように構えている。

華景が、少女を敵と認識してしまったようだ。
これは少し急いだほうがいいわね……。

「貴方、名前は？」

「……許緒」

「では許緒。何故いきなり攻撃してきたの？」

私が問いかけると、許緒は先ほどよりもさらに厳しい目で私を睨む。

「役人なんか信用できるもんか！ ボク達を守ってくれないくせに税金ばっかり持つていいて！！」

それは盜賊から守つてもらえたかった民の総意。

統治者として民にいつもとも言わせたくない言葉。

許緒はそれを力の限り私に叩きつけてくる。

「ボク達がどれだけがんばって育ててもも全部役人が持っていく！
何もしてくれないくせに！」

賊が来ても、病気が流行つても、何も！だからボクがみんなを守
るんだ！」

「ボクがみんなを盗賊からも……役人からも守るんだ！！」

「この子はきっと、こんな事を言つた後に処断されてしまう」とも
分かっている。

それでもなお、言わずにはいられない。それほどまでに、民は追
い詰められている。

少女の絶叫を聞く皆の顔が歪んでいた。

華景の鎌がピクリと動く。

攻撃の意思はなく、華景は構えていた大鎌をゆっくりと下ろして
私を見た。

「…………そう。許緒、「めんなさい」

私は激昂する許緒に、身分など氣にもせずに深々と頭を下げた。
ここは私が治める領地ではない。だとしても、同じ為政者として
謝りたかった。

この国の民である許緒に、この国の為政者として。

「華琳様……？」

「華琳様……」

「何と……」

「え？ あの……！」

頭を上げ、予想外の事に一人慌てる許緒に改めて向き直る。

「そういえばまだ名乗っていなかつたわね。私は曹操。山向いの街で、刺史をしているものよ」

「山向いの……あつそれじやつ！？」

私が名乗ると、今度は許緒が深々と頭を下げる。

「山向いの街の噂はよく聞いています！
向こうの刺史様はすごく立派な人で、悪いことはしないし、税金も安くなつたし、盜賊もすごく少なくなつたつて！
そんな人に、ボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、わたし達が一番よく知っているもの。

『官』と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも……」

まだ気まずそうにする許緒に首を振る。
この子が謝る必要はどこにもないのだから。

「だから許緒。あなたの勇氣と力、この曹操に貸してくれないか
しら？」

「え……？ ボクの力を……？」

「私はいざれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。

だから……村の皆を守るために振るつたあなたの力と勇気を、この私に貸して欲しい」

「華琳さまが、王に……？」

「ええ」

支配者ではない、為政者として。
帝ではなく、王として。

戦をするためではなく、戦を終わらせるために。

「あ、あの、曹操様が王様になつたら……ボク達の村も守ってくれますか？」

盗賊もやつづけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでもなく……。
この大陸の皆が平和に暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……みんなが……」

私の言葉をかみ締めるようにつぶくつと、許緒は繰り返した。

続・一話（後書き）

もつ今日は思いついたネタをじつはって本編にねじ込もうかとばかり考えていました。

ああ……早くあのキャラのところまで進めたい……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172z/>

恋姫無双 曹丕伝

2011年12月21日18時51分発行